

中央大学父母連絡会

Kusa no Midori

巻頭特集

- 1 中央大学父母連絡会へようこそ
- 2 父母懇談会中止のお知らせ
- 3 学部長からのメッセージ
- 4 FOCUS! 経済学部

草のみどり

5

2020 May
Vol.319

2020年5月





Be Ahead of the World
世界を動かす
人になろう vol.01

国際経営学部では、学生が企業や公的機関で訪問調査を行う特別プログラムを2019年度に実施。第1期生である1年生の総数309名のうち103名、のべ177名の学生が参加しました。複数機関での訪問調査に参加した3名の学生に、現地での気づきや学んだことを聞きました。

ご協力いただいた企業

- NHK国際放送局 ■経済産業省通商政策局 ■独立行政法人国際協力機構(JICA)
 - 日本航空(株) ■野村證券(株) ■(株)フジテレビジョン ■(株)ポリゴン・ピクチュアズ ■三菱ふそうトラック・バス(株)
 - 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) (50音順)
- 訪問先ごとの調査テーマやレポートは、中央大学公式Webサイト内、国際経営学部「What you can do」からご覧いただけます。
<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/globalmanagement/point/tour/>



訪問調査に参加した高荒さん、出口さん、瀧谷さん(右から)

——皆さんの訪問先や、そこで感じたことを教えてください。

高荒 私は3つの企業を訪問しました。三菱ふそうトラック・バスと日本航空の2社は、IT技術を駆使した効率的な物流システムや、実際に貨物を輸送する方法に興味があり選びました。コンサルティング会社である三菱UFJリサーチ&コンサルティング(MURC)は、未知の部分が多かった業務内容を具体的に知りたかったからです。3社の訪問を通じて、社会人がどのよ

「特別鼎談」
実社会への興味を
将来像の明確化に
つなげる企業訪問

うな考え方で仕事に向き合っているのかという点にも興味がありました。

出口 私も社会人の仕事に対する意識に興味がありました。最初の訪問先に経済産業省を選んだのは、「高学歴でプライドも高いというイメージが強い官僚の実像を確かめたい」という興味本位な動機からです。結果から言えばそのイメージは大きく変わりました。「日本を支え、動かしたい」という省庁ならではの強い使命感に、感銘を受けました。MURCを選んだのは、漠然と「グローバルに活躍したい」という目標があったからです。同社は、経済成長が著しく、私も注目しているインドネシアに子会社があり、情報収集したいと思いました。印象深かったのは、同社の起業支援業



高荒 大輔 たかあら だいすけ
国際経営学部 国際経営学科2年
私立杉並学院高校(東京都)出身

瀧谷 奈穂 たきや なほ
国際経営学部 国際経営学科2年
私立宇都宮文星女子高校
(栃木県)出身

出口 英大 でぐち ひでひろ
国際経営学部 国際経営学科2年
出身高校非公表(カナダ・日本)



三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)での集合写真。出口さんと高荒さんが参加しました。

省で働く学生と参加しました。経済産業省の出口さんと高荒さんが参加しました。



務では、支援先企業の人間力が重視されるという点。人の「思い」がビジネスでも重要な要素になるのだと知ることができました。



日本航空（株）のオペレーションルームにて。瀧谷さんと高荒さんが参加しました。

瀧谷 私は日本航空、経済産業省、NHK国際放送局の3機関を訪ねました。授業で学んだ内容と実社会をリンクさせ、経営理論を検証することが目的でした。なかでも興味

深かったのは、市場戦略やマーケティングのケーススタディで扱った日本航空です。格安航空会社（LCC）との差別化を進め、高価格帯に相応しいサービス提供が成功の要因になったことを学び、現場を見たかったのです。現地では、同社が母体となった新会社の取り組みであり、従来のLCC利用者層に向けて品質を訴求する新たなサービス「ZIPAIR」に懸ける熱い思いを肌で感じ、独自の戦略を学ぶこともできました。

高荒 実際に行くからこそ理解できることがありますね。三菱ふそうトラック・バスは、ドイツ企業が資本参加したことで独自の企業文化が生まれたと言われています。実際に訪問してお話を聞いたことで、ヨーロッパ的な労働スタイルが浸透し、個人の裁量が大き



三菱ふそうトラック・バス（株）での集合写真。

能しているんです。

い成果主義であることがわかりました。しかも、社員にとつて成果主義はプレッシャーではなく、意識や意欲を刺激して個々のチャレンジを促す仕掛けとして機

瀧谷 意識面の話はとても参考になりますね。日本航空では、人事担当役員や中央大学の卒業生からもお話を聞き、大学生活の送り方についてのアドバイスもいただきました。要約すれば「一人でできることは少ないからこそ、多くの人と語らい、人の輪を広げるべき。それが有益な情報収集にもつながる」という内容。まさに大学は多様な出会いのチャンスが豊富にあるため、積極的に人と交流しようと思いますし、目標であるエアライン業界への就職に向けて、チャレンジを重ねていこうとあらためて思いました。

出口 今後の大学生活につながる収穫は私も多かったです。それまでは将来設計に迷いがありましたが、企業訪問

が転機になって、社会のためになる仕事がしたいと思うようになり、海外志向も強まりました。ある先生が「一つではなく、二つの武器を身につけて融合させることが、今後の社会で生き残る術」と話されています。そこで私は、USCPAというアメリカの公認会計士資格を取得することと、グローバル企業であるMURCで大切さを感じた英語力の向上という二つの明確な目標を設定しました。

——第1期生としての初年度を振り返って、率直な感想を聞かせてください。

瀧谷 英語での授業が全体の7割を占め、経営に関わる英語の専門用語を文脈のなかで理解できるようになってきた実感があります。英語には着実に慣れていきますし、プレゼンテーションで実際に使う機会も多いため、知識として定着していくのだと思います。

高荒 英語力は確実に向上しますが、知らない単語もまだまだありますが、海外からの留学生と英語で会話できるようになり、新たな発見の喜びにもつながっています。私が将来に向けて重視しているのは、理想と現実を埋めるために知識と経験を積み重ねること。その一つとして、情報処理技術者試験に挑戦する準備を進めています。

出口 私はカナダの高校に通った時期があるのですが、この学部には当時のようなグローバルなマインドを感じます。学生の発言一つとっても、正解・不正解を意識し過ぎず、まずは口に出します。受け身ではなく、自ら新境地を切り拓くパイオニア気質の学生が多いため、教わるのではなく、主体的に見聞を広めようとする意識が強い人に向いている学部だと思いますね。

■指導教員のコメント



国際経営学部准教授
くまつき 国松 麻季

「Open Your Eyes to Think of Your Own Career」。これが2019年度に実施した訪問調査プログラムのコンセプト。意欲的に参加した学生は主体的な姿勢がより一層強まり、将来への道のりがクリアになってきた印象があります。しかも、参加しなかった学生にも大いに刺激を与えてきています。グローバルビジネスリーダーに必要な知識が身につく経験の一つとして、2020年度も積極的に実施する方向で検討を進めています。